
発展学習03-9 浦島太郎の歓待をめぐる思考実験

本当に楽しめる環境とは何かを考える思考実験として、童謡「浦島太郎」の2番の歌詞を例にとりあげてみましょう。

元の歌詞では

- 乙姫様の御馳走に 鯛や比目魚の舞踊 ただ珍しくおもしろく 月日のたつのも夢の中

となっていました。これでは浦島太郎は受け身的に接待されているだけに終わってしまいます。「スキナーの幸福観」のところで述べたように、上記の環境では、浦島太郎が能動的に行動して好子出現により強化される機会は全く奪われています。

ではどうすればよいのでしょうか。以下は行動分析学的替え歌の一例です。

【元の歌詞】 乙姫様の御馳走に

【行動分析学的替え歌】 一緒に創ったごちそうに

【解説】 竜宮城のみんなと一緒に料理をつくるという能動的行動が強化されるようになります。この場合の「つくる」には、単にレシピ通りに作るだけでなく、新しい料理を創作するという意味が込められています。

【元の歌詞】 鯛や比目魚の舞踊

【行動分析学的替え歌】 鯛やヒラメとダンスして

【解説】 舞い踊りをただ見ているだけでは能動的とは言えません。みずからダンスに参加すれば、上手に踊れるという結果、あるいはみんなから賞賛されるという付加的好子によって強化されるようになります。もちろん、ダンス以外、さまざまなスポーツやゲーム、あるいは無理強いされない範囲での仕事や勉強であっても結構です。

【元の歌詞】 ただ珍しくおもしろく

【行動分析学的替え歌】 多様な行動選択し

【解説】 元の歌詞の「ただ珍しく」という刺激はすぐに飽和化してしまいます。飽きないためには多様な行動を選択する必要があります。

【元の歌詞】 月日のたつのも夢の中

【行動分析学的替え歌】 強化されつつ持続する

【解説】 月日の経つことに気づかないほどに楽しむためには、やはり行動が強化され、そ

れによって継続することが肝要です。

以上をまとめると、行動分析的替え歌は以下ようになります。

一緒に創ったごちそうに 鯛やヒラメとダンスして
多様な行動選択し 強化されつつ持続する

なお、以下は全くの余談ですが、太宰治の『お伽草紙』という作品

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000035/card52380.html>

の中には、元の歌詞とも行動分析的替え歌とも全く異なる「竜宮城観」が紹介されています。皆さんはどう思われますか？

「わかつてみますよ。あなたの御想像は、まあドンヂヤンドンヂヤンの大騒ぎで、大きなお皿に鯛のさしみやら鮪のさしみ、赤い着物を着た娘つ子の手踊り、さうしてやたらに金銀珊瑚綾錦のたぐひが、——」

「まさか、」と浦島もさすがに少し不愉快さうな顔になり、「私はそれほど卑俗な男ではありません。しかし、私は自分を孤獨な男だと思つてゐた事などありましたが、ここへ来て眞に孤獨なお方にお目にかかり、私のいままでの氣取つた生活が恥かしくてならないのです。」

・・・

「乙姫はべつにあなたを、どこかへ案内しようとしてゐるわけぢやありません。あのかたは、もう、あなたの事なんか忘れてゐますよ。あのかたは、これからご自分のお部屋に歸るのでせう。しつかりして下さい。ここが龍宮なんです、この場所が。ほかにどこも、ご案内したいやうなところもありません。まあ、ここで、お好きなやうにして遊んでゐるのですね。これだけぢや、不足なんですか。」

・・・

「いや、さう言はれてみると、私には、少し判りさうな氣がして來たよ。お前の推察も、だいたいには於いて間違ひはなささうだ。つまり、こんなのが、眞の貴人の接待法なのかも知れない。客を迎へて客を忘れる。しかも客の身邊には美酒珍味が全く無雑作に並べ置かれてある。歌舞音曲も別段客をもてなさうといふ露骨な意圖でもつて行はれるのではない。乙姫は誰に聞かせようといふ心も無くて琴をひく。魚どもは誰に見せようといふ衒ひも無く自由に嬉々として舞ひ遊ぶ。客の讚辭をあてにしない。客もまた、それにことさらに留意して感服したやうな顔つきをする必要も無い。寝ころんで知らん振りしてゐたつて構はないわけです。主人はもう客の事なんか忘れてゐるのだ。しかも、自由に振舞つてよいといふ許可は與へられてゐるのだ。食ひたければ食ふし、食ひたくなければ食はなくいいんだ。酔つて夢うつつに琴の音を聞いてゐたつて、敢へて失禮には當らぬわけだ。ああ、客を接待するには、すべからくこのやうにありたい。何のかのと、ろくでも無い料理をうるさくすすめて、くだらないお世辭を交換し、をかしくもないのに、矢鱈におほほと笑ひ、

まあ！　なんて珍らしくもない話に大仰に驚いて見せたり、一から十まで嘘ばかりの社交を行ひ、天晴れ上流の客あしらひをしてゐるつもり of ケチくさい小利口の大馬鹿野郎どもに、この龍宮の鷹揚なもてなし振りを見せてやりたい。あいつらはただ、自分の品位を落しやしないか、それだけを氣にしてわくわくして、さうして妙に客を警戒して、ひとりでもからまはりして、實意なんてものは爪の垢ほども持つてやしないんだ。なんだい、ありや。お酒一ぱいにも、飲ませてやつたぞ、いただきましたぞ、といふやうな證文を取かはしてゐたんぢや、かなはない。」

・・・

龍宮には夜も晝も無い。いつも五月の朝の如く爽やかで、樹蔭のやうな緑の光線で一ぱいで、浦島は幾日をここで過したか、見當もつかぬ。その間、浦島は、それこそ無限に許されてゐた。浦島は、乙姫のお部屋にも、はひつた。乙姫は何の嫌惡も示さなかつた。ただ、幽かに笑つてゐる。

さうして、浦島は、やがて飽きた。許される事に飽きたのかも知れない。陸上の貧しい生活が戀しくなつた。お互ひ他人の批評を氣にして、泣いたり怒つたり、ケチにこそ暮してゐる陸上の人たちが、たまらなく可憐で、さうして、何だか美しいもののやうにさへ思はれて來た。